新日本音楽の潮流に乗って

中島聖山

これまで十九回にわたって、本道における尺八界の歩みを辿ってきた。流派にこだわることなく、北海道の尺八界全体を視野に入れ、後世に書き残しておきたいと思う出来事について、記録の裏付けを取りつつ書いてきたつもりである。

新開地である北海道も、現在では既に三世代目が活躍する時代になり、明治から大正・昭和にかけての本道尺八界について、語れる人がほとんどいなくなった。

そもそも今回のシリーズを手掛ける動機となったのは、歴史が浅いといわれる北海道ですら、あらゆるジャンルで先人達の貴重な足跡が消え始め、歴史を辿ることが難しくなってきていることから、せめて邦楽の中でも尺八のことについて、先人達の足跡を辿り、可能な限り書き留め、記録として残しておきたいと思ったからである。

こうした動機で始めたこともあり、これまでの記述は、全て明治から昭和初期にかけての、各流派の北海道進出から定着までに限定し、黎明期に的を絞った形となった。

戦後から現代に至る発展の様子については、どの流派も語れる人がたくさんいるし資料もあるので、後日誰かが書き留めてくれると思っている。

シリーズを終えるにあたって過去の記述を読み返してみると、まだまだ内容的に浅く、手を加えたい心境にかられるが、時間のない中での取り組みであり、資料探しから始めなければならなかったので、いつも原稿締切りを守れず、発刊の足手まといになっていたことを考えると、妥協せざるをえなかったのかとも思う。いずれにしても機会を改め、納得の行くものに仕上げたいと思っている。

主旨に深い理解を示し、二十回にわたって貴重な誌面を割いてくれたアドビューローの竹内氏に、心から感謝を申し上げたい。

尺八音楽の変遷

明治以降の尺八音楽は、大きくとらえて三つに区分できる。

普化宗の虚無僧達が法器として吹簫禅に使用していた尺八が、楽器として扱われるようになったのは、明治四年のことである。普化宗の廃宗に伴って、尺八の生命までが絶たれてしまうことを恐れた吉田一調や荒木古童らが、文部省に嘆願して、楽器として演奏する許可を取り付けたことに端を発するからである。

従って当初は既存の三曲合奏に後から加わる立場であり、箏または唄のために作曲された、いわゆる古曲の胡弓のパートを尺八で演奏するものだった。

その後、多くの尺八家達の手によって、古曲に対する尺八の手付けが成されたが、いずれも演奏形態上は、明治初期と変わるものではない。この時代の尺八は、唄・箏さらには三絃の編成で完成された曲の中に割り込んだ形であり、尺八独自の役割を担っているものではなかった。

以上が第一期といえるだろう。

大正九年十一月二十七日、東京は丸の内の有楽座で、本居長世と宮城道雄の作品を扱った演奏会が開催された。「新日本音楽大演奏会」と銘打ったこの会には、作曲者は勿論のこと尺八家の吉田竹堂（後の晴風）夫妻始め、声楽家や洋楽器演奏家などが出演した。

この会の評判はよく、新しい時代の邦楽として新聞でも大きく取り上げられた。その後は宮城道雄の作品を中心に「新日本音楽」という言葉が使われ、全国的に流行することとなった。

宮城道雄の作品は、西洋音楽の影響を強く受け、リズムやメロディーがはっきりしていた。尺八を吹くこともできた宮城道雄は、自

晩年の吉田晴風

昭和４年　納戸町宮城宅にて（左から）宮城道雄・吉田恭子・吉田晴風

優雅な邦楽の音づくりにご奉仕する

邦楽〈琴・三絃〉の店

川村樂器店

札幌市中央区南3条西2丁目（HBC三条ビル）☎(代)221-4970

■営業時間／午前10時～午後7時／月曜定休日

●各種カードをご利用下さい。

作の中でメロディー楽器として尺八を大いに活用した。こうして新日本音楽と呼ばれる作品によって、尺八はそれまでの従属的な立場を脱却し、箏・三絃・十七絃と対等な地位を獲得するとともに、パートとしての役割を果たすこととなった。

これが第二期であろう。

昭和三十年代に入ってからは、邦楽四人の会や尺八三本会、新日本音楽集団などが中心になって、「現代邦楽」と呼ばれる新しいスタイルの音楽を盛んに演奏した。

これは長い間続いた宮城新曲からの開放を目指すとともに、より深く西洋音楽と関わりながら、邦楽器の可能性を探ろうとする動きでもあった。

現代邦楽の作品では、楽器の特徴を極端なまでに追求するものが多く、尺八は重要な役割を果たすことになった。諸井誠の作品である「竹籟五章」や「対話五題」、武満徹が尺八と琵琶のために作った「ノヴェンバー・ステップス」などでは、尺八が主役を演ずることとなった。

古典本曲の世界では論を待たずに主役だった尺八が、普化宗の廃宗に伴って三曲合奏の中で従属的立場から再出発し、対等な立場を経て、また主体的な立場へと浮上してきたのである。

今回は尺八の立場を変える引き金ともなった、新日本音楽と北海道尺八界とのかかわりについて辿ってみることにする。

関東大震災の答礼使節

吉田晴風が「新日本音楽」と銘打って、北海道で初めて演奏会をひらいたのは、大正十二年秋のことである。

大正十二年九月一日、関東大震災が首都東京を直撃し、大災害へと発展した。この時、世界中から救援物資が届けられ、アメリカからも多くの物資が届いた。吉田晴風はその返礼として、日本の音楽使節をアメリカに派遣することを企画し、報知新聞社に持ち込んだ。当時の金で一万円もかかる費用を、主催者である報知新聞社には負担させないとの吉田案は、ただちに重役会議に付議され承諾された。費用は「新日本音楽」と銘打って、全国各地で送別演奏会を開催し、その入場料収入で捻出しようとするものだった。震災を逃れて宮城道雄が韓国に行っていたこともあり、吉田晴風夫妻を中心とする八名の訪問団が構成され、北は東北・北海道から、南は名古屋・大阪で報知新聞社主催の「遣米答礼音楽使節団」送別演奏会が開催された。

震災に対する国民の関心が高かったこともあり、この演奏会はどの会場も超満員の盛況で大成功を収めたのである。と同時に、東京で始まった新日本音楽運動が、地方への広がりを見せ、急速に発展するきっかけともなった。

大正十二年十二月二日、東京を出発した使節団一行は、ハワイ・アメリカ本土を巡演し、翌大正十三年三月三十日、横浜に帰ってきた。

この事業の成功により、吉田晴風は報知新聞社との関係を深くした。大正十三年の夏、報知新聞社は渡米の報告も兼ねた演奏会を企画し、吉田晴風に依頼して、反響の大きかった北海道と九州で「新日本音楽」を紹介した。

こうして二年続けて吉田晴風が渡道したこともあり、北海道各地で新日本音楽に対する関心が高まった。中には入門を希望する者も多く、吉田夫妻と北海道邦楽界との結びつきが生まれた。

吉田晴風と北海道

大正十四年七月下旬、琴古流鈴慕会の藤沢鈴昭の強い要請を受け、吉田晴風は新日本音楽の講習を目的に札幌を訪れた。自作の作品や宮城の作品を普及させるためだったが、滞在中に演奏会も行われた。

報知新聞札幌支局の主催で行われた「音楽舞踊の会」は、八月一日と二日の両日、エンゼル館で開催された。演奏会では本居長世の作品が取り上げられ、本居みどりの唄、本居貴美子の舞踊が中心となった。吉田晴風は古典本曲「恋慕」と「流れの潮」を独奏し、会に華を添えた。

大正十二年秋から毎年来道していたこともあり、札幌を中心に新日本音楽を支持する動きが出てきた。竹方・糸方ともに熱心だったが、特に琴古流鈴慕会の藤沢鈴昭が本物で、新日本音楽協会北海道支部を引き受け、自ら演奏会や講習会の企画にあたった。

昭和二年、ソプラノ歌手の永井郁子が札幌で独唱会を開催したが、この時藤沢鈴昭は吉田晴風の紹介で、宮城道雄の作品を高橋文子と伴奏して人気を博した。

新日本音楽協会の支部事務局を担当していた藤沢鈴昭は、小樽・札幌の邦楽家に声を掛け、吉田晴風夫妻とソプラノ歌手・佐藤千夜子を招いて、支部主催の演奏会を企画した。昭和二年十月十四日の小樽倶楽部での演奏会の後、一行は十月十六日に札幌の今井記念館で昼夜二回の演奏会に出演した。

吉田晴風夫妻が渡米して絶賛を博したとの前宣伝もあり、市民の反響は大きかった。当日の演奏会には、藤沢鈴昭の呼びかけもあり、地元から藤沢鈴昭のほか都山流の畑中康山や糸方の中徳検校・渡辺輝美井・横山光喜勢・竹中賀寿井などが出演して会を盛り上げた。

この時、吉田晴風は自作の「小川のほとり」「かもめ」などのほか、宮城道雄の作品である「清水楽」や「春の夜」などを吉田恭子の箏で演奏した。

また、同行した佐藤千夜子は、中山晋平や本居長世の作品をピアノ伴奏で歌い、吉田夫妻の伴奏で「コスモス」「せきれい」など宮城道雄の作品を歌った。

地元邦楽家の全面的な支援を受けて実施したこの会は、大成功に終わった。

新日本音楽の定着をみた札幌で、翌昭和三年七月十二日には、新日本音楽協会主催の永井郁子慈善独唱会が公会堂で開催された。この時も藤沢鈴昭は、「若水」「せきれい」など宮城道雄の作品に尺八伴奏を行い、「新日本音楽の藤沢」を印象づけた。

昭和五年六月にも吉田夫妻は北海道を訪れ、札幌を始め全道各地で演奏会や講習会を開いている。

この時代の面白いところは、琴古流の藤沢鈴昭が盛んに新日本音楽を取り上げ、舞台に

舞踊・演劇・テレビ・衣裳・小道具

松竹衣裳株式会社

東京店　東京都中央区新富２－２－８松竹新富ビル　電話03(3552)5921㈹〒104
大阪店　大阪市西区南堀江通り２－１－３　松竹大阪ビル　電話(538)1181㈹〒550
九州出張所　福岡市博多区中洲５－１－22　松月堂ビル内　電話(272)0141㈹〒810
北海道出張所　札幌市中央区南２条西６丁目　大友ビル　電話(011)219－0805〒060

舞踊小道具も営業いたしております。衣裳同様御用命をお待ち申し上げます。

乗せていることである。本来、宮城道雄の作品は都山流の得意とするところで、新日本音楽運動も、畑中康山が中心になって推し進めるのが自然であった。琴古流の藤沢鈴昭が、新日本音楽協会の支部事務局を引き受けて、具体的な活動に取り組めたのも、東京から遠く離れた北海道だったからかも知れない。

戦時下の新日本音楽

昭和十三年七月十六日から約二週間にわたって、北海タイムス社主催の「国粋芸術の夕」が全道各地で開催された。これは応召軍人家族や戦没者遺族、並びに傷病兵士などの慰問を目的として企画されたものだった。

北海タイムス社の招きを受けた吉田晴風夫妻を始め、花柳徳兵衛など一行十人は、七月十三日に東京を出発した。

七月十五日、函館での公演を終えた一行は、列車で札幌へ向かい、十六日午前七時四十分に札幌駅に降り立った。旅館で着替えを済ませた一行は、休む間もなく月寒陸軍病院へ向かい、午前十時から約一時間にわたって慰問の公演を行った。娯楽室に集まった白衣の傷病兵士を前に、河本事業部長の挨拶に続いて、吉田晴風は慰問の言葉を述べた。

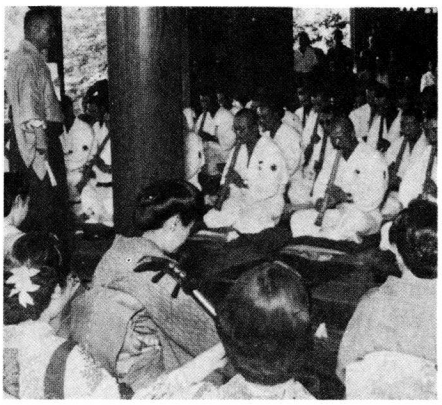
吉田晴風は自作の「かもめ」「小川のほとり」「子守唄」を婦人の箏で演奏した。また、花柳徳兵衛・孝兵衛・福本新らは「二つ面」「浮かれ獅子」「三番叟」などを踊った。最後は晴風の「江差追分」独奏で締めくくられたが、集まった兵士達の拍手は鳴り止まなかった。午後からは定山渓療養所でも同様の慰問が行われた。

そして、夜七時からは札幌市公会堂で、戦没者遺族慰安のための公演が行われた。この会は一般市民も対象にしたことから、会場には千五百人が詰めかけ、超満員となった。

三部構成で行われた「国粋芸術の夕」は、花柳徳兵衛の長唄「松の緑」で始まった。続いて地元の青沼きよし、曽波初子の清元「四君子」などが披露された。

二部では吉田晴風夫妻による「山村の水車」「春謳歌」などの演奏があり、万雷の拍手を受けた。

札幌のあと一行は小樽・室蘭・旭川・帯広・釧路・根室でも同様の公演を行い、旭川陸軍病院や層雲峡療養所では慰問を行って二十八日に帰京した。



白衣傷痍軍人の合奏研究会（昭和14年）

大戦も終末に近づいた昭和十九年八月、大日本芸能会主催で軍事保護院後援の傷病軍人療養所慰問巡演が企画された。メンバーは吉田晴風夫妻ほか舞踊家など四名で、八月八日に東京を出発した。

先ず日立・仙台など東北公演をしたあと北海道に入り、全道各地で慰問を行った。札幌では定山渓の北海道第二療養所と陸軍病院を訪問し、室蘭では産業戦士の慰安を行った。

昭和16年２月満州（中国東北部）慰問演奏旅行（左から３人目）吉田晴風

藤沢鈴昭から唯是想山へ

藤沢鈴昭が琴古流本来の古典に戻り、新日本音楽運動から次第に離れていった後、都山流の唯是想山が久本玄智の作品なども取り上げ、更に幅広い活動へと発展させていった。

昭和十一年二月十一日に札幌市公会堂で開催された建国祭記念の邦楽演奏会で、唯是想山は「新日本音楽」と題して久本玄智作曲の「美しき春」を、箏・唯是菊枝、唯是禮子で演奏した。

また、昭和十五年二月十一日の第十一回建国祭記念音楽会では、宮城道雄の「満州調」を取り上げ、箏高音・唯是菊枝、唯是智子、箏低音・唯是禮子で演奏した。尺八は一部・唯是想山、中川康流、朝妻康奏、二部・植村想淳、岩館想波だった。

更には同十五年十二月十五日に札幌邦楽連盟主催で行われた、紀元二千六百年記念邦楽演奏会で、町田嘉章の「佐渡の印象」を唯是想山の指揮で演奏した。この曲はフルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロ等の入る大合奏曲だが、尺八は一部を朝妻康奏、中川康流、片岡想敏、東野康風、中津川都庭、松橋想水、二部植村想淳、岩館想調、高沢想曙で演奏した。

札幌三曲協会が設立された一か月後の昭和十八年八月二十九日、札幌の鉄道集会所で建艦献金の三曲演奏会が、札幌三曲協会主催で行われた。

この時、唯是菊枝は社中として新日本音楽「御代の祝」を演奏したが、尺八は山上熊郎、東野康風、牧野康遼、横道康浩の四名で、唯是想山と一門の名はなかった。

●

以上をもって未完ながらシリーズを終えたいと思います。

五年間のご愛読、心から感謝申し上げます。

（中島　聖山）

舞踊小道具
舞台美術

近江屋

札幌市東区北36条東４丁目
☎ (011) 731－6866